

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：30106

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720164

研究課題名（和文）九州地方の二型音調方言における共通語音声の受容に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study on adaption of Standard Japanese sound in two-pattern dialects of Kyushu Japanese

研究代表者

松浦 年男（MATSUURA TOSHIO）

北星学園大学・文学部・講師

研究者番号：80526690

研究成果の概要（和文）：

九州地方の二型音調を持つ方言において、外来語と複合語では共通語音声の受容に関して異なるカテゴリーを形成している。外来語は共通語の音声特徴と受容先方言の言語体系に基づいて音調が決まるのに対し、複合語は共通語音声とは独立し、前部要素の音調の型や長さといった特徴に基づいて全体の音調が決まる。ただし、平板化形態素を含む複合語においては共通語音声の影響を受けたものが観察されていることから、共通語音声は徐々に方言の体系に影響を及ぼしつつある。

研究成果の概要（英文）：

In two-pattern dialects of Kyushu Japanese, loanwords form a different category from compounds in regard to sound adaptation from Standard Japanese. For loanwords, phonetic feature of Standard Japanese determines tone in dialects. On the other hand, tone of compounds depends on a tonal type and mora length of former element of compounds. We, however, found that compounds which contain deaccented morphemes in Standard Japanese are also deaccented in a dialect. Thus, sound system of dialects is affected gradually by sounds of Standard Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学, 音声学

1. 研究開始当初の背景

長崎県南部から鹿児島県に分布している二型音調方言は、音調（広義のアクセント）の対立が下降調と非下降調という 2 つしかないという共通した特徴を持っている。伝統的に九州地方の二型音調方言は、鹿児島方言タ

イブと長崎方言タイプの 2 つに分かれる。両方言の違いはピッチパターンと共通語音声との対応関係にある。まず、鹿児島方言が後ろから数えた位置に下降調のピークが来るのに対して、長崎方言は前から数えた位置にピークが来る。また、鹿児島方言の外来語は

共通語音声のうち、下降があるかないかに対応しているのに対して、長崎方言の外来語は共通語音声のうち、下降の有無の他に下降の位置にも対応している。このようにこれら両方言タイプには違いが見られるものの、その理由が一体何にどこにあるのかは明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究では、天草島で話されている方言を中心に調査する。天草島の方言に焦点を当てる理由は、天草島の方言の多く(例えば本渡方言)は長崎方言タイプに分類されるが、南部の牛深方言は鹿児島方言の特徴を持つことにある。つまり、隣接する地域に長崎方言タイプの方言と鹿児島方言タイプの方言が存在するのである。この地域の方言における共通語音声の受容の実態が分かれば、長崎方言タイプと鹿児島方言タイプの違いも明らかにできる可能性がある。

この他に、二型音調を持つ方言として長崎方言の記述を進めていく。また、他のタイプの方言や音声現象についても検討する。

3. 研究の方法

本研究では、調査語リストを作成し、母語話者に対して聞き取り調査を行う。その際、危機方言の記述研究という観点から、単語の音調だけに偏らず、イントネーションや促音といった特徴についても記述できるように配慮する。調査語は、外来語と複合語を中心とする。これは、従来の研究で用いられた和語は方言間の史的变化の関係を捉えることはできるが、音節構造や長さの点で共通語音声の受容を見るには不十分であると判断したためである。

また対象として、上述した天草島の方言の他に、福岡方言や沖縄地方の方言(琉球語)などについても調査を行う。これは、ある現象が特定の方言に固有のものか、通方言・通言語的なものかを明らかにできる可能性について検討を行うためである。

4. 研究成果

(1) 長崎方言におけるアルファベット関連語彙の音調

長崎方言においてアルファベット関連語彙の音調がどのように実現するかについて調査を行った。その結果、FやPといったアルファベット単独では下降調であったのに対し、CDやSFといったアルファベット頭文字語はほぼ全て非下降調で実現した。これは、標準語音声との対応関係に注目することで説明ができる。標準語において下降(アクセント)が初頭2モーラにあれば長崎方言では下降調、標準語で3モーラ目以降に下降がある、または下降がない場合は長崎方言では非

下降調になる。アルファベット単独は標準語においていずれも第1モーラに下降があるため長崎方言では下降調に、アルファベット頭文字語は標準語においていずれも3モーラ目以降にしか下降がないため長崎方言では非下降調になる。また、LチームやD組といったアルファベット複合語について調査したところ、後部要素の形態素によって、外来語と同じ規則性が見られるもの、一般の複合語と同じ規則性が見られるもの、両方の規則性が見られるものが見つかった。そこで、一般の複合語についてさらに検討を行い、共通語における平板化形態素が後部要素に来たとき、複合語音調がB型になることを示した。以上の成果は、共通語音声の影響が一般の外来語に限らず、アルファベット頭文字語の音調にも見られること、さらに、平板化形態素という外来語とは異なるカテゴリーの語彙にまで拡張していることを意味している。

(2) 長崎方言における音調の音声実現

長崎方言を対象に、音調が音響音声学的にどのように実現するのかについて調査を行った。調査は単語レベル、文レベルそれぞれについて行った。

まず、単語レベルについて報告する。長崎方言の音調は下降調の場合、第2モーラにピークがあり、他のモーラは低いと報告されており、非下降調の場合、最終モーラのみ高い、または全体にわたって上昇すると報告されている。下降調に関しては、「低くなる」というのが音声的にどのような実体を持つかは明らかではない。少なくとも、下降には東京方言の起伏式のようにあるモーラ間でのみ急激に下降する場合のほかに、平板式のように頂点から直線的な下降を示す場合の2つが考えられる。また、非下降調に関しては、報告者の聴覚印象では、平坦に実現する、もしくは第2モーラで少し上昇する場合があるように感じられた。つまり、明確な上昇が感じられなかった。そこで、本研究では発話調査に基づいて、長崎方言の二型音調の音響音声学的な実態を記述した。単語単独での発話と、名詞+動詞での発話を録音し、音響分析を行ったところ、下降調は第2モーラを頂点に、韻律語末に向かって直線的に下降すること、B型は単独か句内かによって個人差が現れることが明らかになった。そして、この結果について、トーン連鎖モデルに基づく音声表示を提案した。具体的には、下降調では、第1モーラ=L、第2モーラ=H*、最終モーラ=Lとし、非下降調では個人差があったため(1)第1モーラ=L、最終モーラ=L(または第1モーラのLの拡張)、(2)第1モーラ=L、第2モーラ=H、最終モーラ=H(または第2モーラのHの拡張)、(3)第1モーラ=L、第2モーラ=H、次末モーラ=H(または第2

モーラのHの拡張), 最終モーラ=H+という3種類を提案した。

次に、文レベルについて報告する。音調が文レベルでどのように実現するかについては東京方言を中心に報告が行われている一方、方言での報告はまだ数が少ない。そこで、この研究では下降調が後続の単語におけるF0を抑制するのか、また統語構造の違いがF0に反映されるのかを検討した。まず、下降調が後続の単語におけるF0を抑制するのかを観察するために、(a)下降調+下降調と非下降調+下降調、(b)下降調+非下降調と非下降調+非下降調というペアで後部要素(+の後)のF0がどのように実現するのかを計測した。その結果、下降調に後続する単語のF0は非下降調に後続する単語のF0よりも低く実現していた。つまり、下降調は後続の単語のF0を抑制することが明らかになった。続いて、統語構造の違いがF0に反映されるのかを観察するために、[[名詞句の 名詞句が]動詞]と[名詞句が[名詞句を 動詞]]というペアでF0の違いを検討した。その結果、このペアではF0の違いが観察されなかった。同様の結果が一型音調方言である小林方言(宮崎県)でも報告されており、以上の結果は一定の型の数しか対立を持たない方言(N型アクセント方言)で共通するパターンである可能性を支持するものである。

(3) 天草島深海方言の音調

本研究では天草島(下島)のうち、深海地区の音調について調査を行った。深海地区は先行研究において牛深地区と似たパターンのピッチで実現するとされていた。具体的には、下降調では前から2モーラ目から後ろから2モーラ目にかけて高いピッチが続き、非下降調では全体的に平板である。

まず、短い和語(鼻、犬など)に様々な助詞をつけた形について調査したところ、おおむね先行研究と同じく下降調では前から2モーラ目から後ろから2モーラ目にかけて高いピッチが続いていた。このように下降のピークが後ろを基準にして決まるというのは鹿児島方言と同じものである。

次に、複合語について調査したところ、前部要素が非下降調の場合、複合語全体も非下降調となったが、前部要素が下降調の場合は前部要素のモーラ数によって分かれた。すなわち、前部要素が2モーラ以下の場合は複合語全体も下降調となったが、前部要素が3モーラ以上の場合は複合語全体は非下降調となった。このような規則性は長崎方言でも観察されるものであり、この点でピッチパターンとは違う傾向を示す。また、複合語の場合、下降調では複合語の境界の次のモーラまでしか高いピッチが続かなかった。このようなパターンは先行研究では報告されておらず

本研究による新たな発見であると言える。また、共通語の複合語において典型的に見られるものであることから、より詳細な検討を要する。

最後に、外来語について調査したところ、共通語において下降の見られる語では下降調に、下降の見られない語では非下降調で実現した。また、ピッチパターンについてはおおよそ後ろから数えて3モーラ目まで高い傾向が見られた。下降調と非下降調の傾向については鹿児島方言と同じ規則性を示している。つまり、深海方言はピッチパターンと外来語については鹿児島方言タイプ、複合語については長崎方言タイプと行うことができる。このことは二型音調方言において外来語と複合語の音調がそれぞれ異なるストラテジーで決まることを示唆している。可能性のひとつとして考えられるのは、外来語は共通語の音声の元を決まる一方、複合語は共通語の音声と関係なく、前部要素の長さや音調の型によって決まるというものである。また、なぜ複合語と外来語では和語(+助詞)とピッチパターンが異なるのかについては未解決である。これについては複合語と外来語についても助詞をつけた形で調査する必要があることを示している。

(4) 福岡方言のイントネーション

単語レベル以外のピッチにも共通語音声の影響が見られるのかを検討するために、福岡方言を対象に、イントネーションについて調査した。対象として福岡方言を選んでいるのは、二型音調方言のイントネーションについてはまだ基礎的な記述の途上にあること、また、福岡方言のイントネーションは言語理論の方面から注目されていることがある。

東京方言(共通語)を対象とした研究において、韻律階層として、発話>メジャー句>マイナー句>音韻語というものが提案されていた。しかし、複数の文からなるgappingを含む文において、gapの部分でポーズが見られることなどから、メジャー句と発話の間にイントネーション句があるという提案がなされた。本研究では福岡方言においてポーズがマイナー句の形成を阻むかを検討した。福岡方言にはWH語(誰が/何がなど)から補文標識(と)までのアクセントが削除される現象がある。たとえば、「マ'リがナ'オヤとワ'インを飲'んだ」という文の「マリ」を「誰」にすると「誰がナオヤとワインを飲んだと？」とアクセントが全て削除される。これは途中に関係節を含んでいても起こるものである。つまり、福岡方言ではかなり広い範囲で1つのマイナー句を形成すると言っている。ただし、先行研究では福岡方言においてgapを含む文のイントネーションがどのように実現するのかについて検討されてこな

かった。

そこで本研究では複数の gap を含み、かつそれらが WH 語と補文標識に挟まれる文(例: いつから山森はデンバーに、檜崎はミャンマーに行くとおと?)を用いて発話実験を行った。その結果、WH 語を用いた場合でもポーズは観察され、またポーズの後の F0 上昇も抑制された。すなわち、福岡方言ではポーズがある場合でも全体は1つのマイナー句を形成していることになる。この結果は、福岡方言におけるアクセント削除の規則ないしは制約がイントネーション句形成よりも優先されることを意味し、統語論と音韻論の境界領域について重要な示唆を与えるものである。また、イントネーションの分野において方言での共通語音声の受容がそれほど見られないことを意味している。

(5) 有声促音の音響的実現

いわゆるピッチとは別の現象で共通語音声の受容が見られるのかを検討するために、有声阻害促音に着目して音響分析を行った。共通語(東京方言)では有声阻害促音は有標な音声で、音韻的には外来語のみに制限され、音声的には半無声で実現する。しかし、方言を見てみると、国語をコッゴというように有声阻害促音は外来語以外にも見られる。このような特徴を持つ方言として天草島の本渡方言、及び琉球語宮古諸方言に着目し、有声阻害促音の音響的実現を検討した。その結果、これらの方言では有声阻害促音の閉鎖区間は有声として実現していた。つまり、共通語と天草本渡方言や宮古諸方言では有声阻害促音について音韻的のみならず音声的にも異なって実現していたのだ。これは音韻レベルの違いが音声レベルの違いにも反映されていることを示すものであり、共通語音声の受容ストラテジーを考える際に重要な示唆を含んでいる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1. 松浦年男 (2012) 「宮古諸方言の音声実現に関する予備的検討」『「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」宮古方言調査報告書』 pp.111-126, 査読なし, <http://www.ninjal.ac.jp/endangered/report/>
2. 松浦年男 (2012) 「長崎方言におけるアルファベット関連語彙の音調」『音声研究』16(1), pp.105-118, 査読あり, <http://ci.nii.ac.jp/naid/110009479342>

[学会発表] (計 7 件)

1. MATSUURA, Toshio (2012) "Voicing of

obstruent geminates in Kyushu dialects of Japanese" International Conference on Phonetics and Phonology 2013 (ICPP2013), 2013年1月25日, 東京: 国立国語研究所

2. 松浦年男 (2012) 「長崎方言におけるアクセントの中和」日本言語学会第145回大会, 2012年11月25日, 福岡: 九州大学
3. 松浦年男 (2012) 「有声阻害重子音の音声実現における地域差に関する予備的分析」日本音声学学会第26回全国大会, 2012年9月29日, 東京: 大東文化大学
4. MATSUURA, Toshio (2011) "Question prosody and intonational phrasing in Fukuoka Japanese" NINJAL international conference on phonetics and phonology 2011 (ICPP2011), 2011年12月13日, 京都: 京都大学
5. MATSUURA, Toshio (2011) "Intonation of Gapping in Fukuoka Japanese" The 21st Japanese/Korean Linguistic Conference (JK21), 2011年10月21日, Seoul (韓国): Seoul National University
6. MATSUURA, Toshio (2011) "Pitch Downtrend in Nagasaki Japanese" 17th International Conference on Phonetic Sciences (ICPhS), 2011年8月17日, Hong Kong (中国): Hong Kong Convention and Exhibition Centre
7. MATSUURA, Toshio (2010) "An acoustic-phonetic investigation of word tone in Nagasaki Japanese" International Conference on Stress and Accent (ISAT), 2010年12月20日, 東京: 国立国語研究所

[その他]

ホームページ等

<http://researchmap.jp/yearman>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松浦 年男 (MATSUURA, Toshio)

研究者番号: 80526690

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: